

# 日韓文化交流基金 NEWS

## Contents

- 1 日韓文化交流基金創立 30 周年のご挨拶
- 2-3 30 周年記念事業 公演「えん〜縁・演・宴〜」
- 4 30 周年記念事業 朗読会「ことばの調べにのせて」
- 5-6 30 周年記念事業 作文コンテスト
- 7-10 30 周年記念事業 基金 30 年史の刊行に際して
- 11 第 13 回日韓歴史家会議
- 12-13 講演会 「朝鮮半島における流行小説の源流」  
講師：富山大学准教授 和田とも美
- 14-15 テーマ別公募事業  
韓国青少年グループ招へい研修団  
友情深めた「日韓誠信学生通信使 2013」
- 16 助成事業 SEOUL でダンス・ダンス・ダンス!  
公益財団法人国際文化フォーラム  
プログラム・オフィサー 中野敦
- 17 第 2 期日韓新時代共同研究プロジェクト報告書
- 18-19 日韓文化交流基金事業報告 (2013年10月～12月)
- 20 賛助会員制度の御案内

The Japan-Korea Cultural Foundation

## 日韓文化交流基金創立 30 周年のご挨拶

日韓文化交流基金は、昨年(2013年)12月15日に創立30周年を迎え、新たなスタートを切ることになりました。

当基金は、「未来志向的な日韓関係を築くためには、国民レベルの文化交流を増進しなければならない」との日韓・韓日両議員連盟の提案により、両国経済界の支援を受けつつ1983年12月に設立されました。

爾来、日韓間の相互理解と友好の増進という目的の下、青少年交流事業を中心として、日韓間の文化、歴史、社会科学に関わる共同研究・会議等の学术交流や、両国間で実施される民間の草の根交流への支援等、多様な事業を進めてまいりました。この間の青少年交流事業に参加した日韓の青少年の数は、約3万人に上ります。

この30年の間の日韓関係の進展には目を見張るものがありますが、そこには、日韓文化交流基金が実施してまいりました一連の交流事業の成果が、一定の役割を果たしたものと自負するものであります。基金の事業に対しご支援、ご協力くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

現在、日韓間の交流を取り巻く環境は大きく変化しています。インターネット等により、互いに容易に相手国の文化に触れ、情報を得ることが出来るようになりました。しかし、真の相互理解のためには直接相手と出会って話し合い、心と心の交流を深めることが何よりも重要です。

また、日本と韓国の間には、時に政治的な葛藤も生じますが、それが両国間の文化交流に影響を及ぼすことは局限されるようになりました。むしろ文化交流が両国の関係を下支えする状況が時流となりつつあります。

このような現況を踏まえつつ、我々は「未来志向的な日韓関係を築くためには、国民レベルの文化交流を増進しなければならない」との設立理念に則って、これからも韓国との交流事業に不断にとり組んで参る所存です。引き続き皆様方のご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

公益財団法人 日韓文化交流基金会長 鮫島章男

## 公演『えん〜縁・演・宴〜』

おかげさまで日韓文化交流基金は2013年12月15日に創立30周年を迎えました。創立30周年を記念して、当基金では記念公演、朗読と鼎談、作文コンクールを実施し、またこれまでの軌跡を振り返る『30年史』を発行(2014年3月刊行予定)します。ここで「30周年記念事業」の各行事に関して、ご紹介します。

合同公演「えん〜縁・演・宴」は、12月17日(火)夕刻、東京の韓国文化院ハンマダンホールで開催されました。今回の公演は、同様に第3期日韓・韓日文化交流会議のフォローアップ事業として2012年5月にソウルで開催された日韓合同公演「同行」の意志を引き継ぐものであり、同会議の日本側メンバーの提案により企画がスタートしました。



2013年12月17日(火) 午後6時開演  
共同主催：公益財団法人日韓文化交流基金 日韓文化交流会議  
後援：外務省 駐日韓国大使館 韓国文化院

日韓・韓日文化交流会議の提言において、「(日韓)互いの相手国の伝統芸術・文化に接する機会及び理解の不足」が指摘され、この課題への対応として「日韓文化芸術コラボレーションプログラム」の推進が提案されていますが、この日の公演には、両国の伝統舞踊、クラシック、現代音楽等、多彩なジャンルのアーティストが出演し、日韓の伝統・現代芸術のコラボレーションを実現しました。



ディディム舞踊団

### 第1部

第1部は「音と舞」と題して、〈韓日文化交流会議〉の委員である鞠守鎬(グク・スホ)氏(舞踊家、ディディム舞踊団団長)が演出を担当し、両国の伝統舞踊、現代舞踊、太鼓チームの演奏等が披露されました。両国の同じジャンルの公演を通じて、日韓のそれぞれのパフォーマンスの特徴が明らかとなり、大変興味深い舞台となりました。

また、韓国側からは、伝統芸能「パンソリ」の第一人者である安淑善(アン・スクソン)氏が出演し、「春香伝」の一節を熱唱しました。



重要無形文化財保有者の安淑善、パンソリ



英哲風雲の会、太鼓



## 第2部

第2部「日韓の饗宴」は、冒頭の『日韓ジャズの競演』と題したセッションで、日韓のジャズアーティストと韓国の伝統打楽器「チャンゴ」演奏者の閔栄治(ミン・ヨンチ)氏が共演、〈韓日文化交流会議〉の南宮演(ナムグン・ヨン)委員もドラムを演奏しました。その後、アメリカを拠点に活動するギタリスト大竹史朗氏と、韓日文化交流基金の運営諮問委員であるフルート演奏者金希叔(キム・ヒスク)氏による共同演奏『日韓ギターとフルートの共演』が続き、まさに日韓の文化芸術コラボレーションを実現するセッションとなりました。公演の最後には、2013年に第14回日韓文化交流基金賞を受賞したソプラノ歌手の田月仙氏が、「ふるさと」「故郷の春」等、日韓両国の代表的な愛唱歌を熱唱してグランドフィナーレを飾りました。

今回の公演には、約300人の観客が来場しました。また、両国のマスコミでも「韓国と日本の舞踏と音楽が調和」(東亜日報)等と大きく取り上げられ、日韓関係における文化交流の重要性を改めて確認し、内外に発信する機会となりました。



田月仙、ソプラノ

## プログラム

### 第1部 音と舞

- 「春雪」ディディム舞踊団
- 「ひとりきりのアリラン Rips」李侖勅
- 「清明の譜 獅子の狂乱」高橋明邦(小鼓、締太鼓)、花柳吉千凰(舞)、竹井誠(笛・尺八)
- 「春香歌より離別歌」安淑善(パンソリ)、李太白(鼓手)
- 「赤鼓」TAGO(打鼓)
- 「海の豊饒」英哲風雲の会

### 第2部 日韓の饗宴

#### 日韓ジャズの競演

- 「フットプリント( Footprints)」磯見博カルテット
- 「おかしな兎のためのワルツ～ Again」南宮演、閔栄治、Moollonkyen

#### 日韓ギターとフルートの共演 大竹史朗(ギター)、金希叔(フルート)

- 「栗毛の馬」
- 「トラジ」
- 「ハンアの舞」第一部「月の乙女」第二部「サンジョ～ブルース」第三部「ダンス」

#### 日韓・歌の饗宴 田月仙(ソプラノ)、安達朋博(ピアノ伴奏)

- 「アリラン～桜」
- 「山河を越えて(高麗山河わが 愛)」
- 「ふるさと～故郷の春」



磯見博カルテット・閔栄治、日韓ジャズ共演



大竹史朗・金希叔、日韓ギターとフルート共演

# 日本と韓国で人気の女性作家による自作朗読と鼎談

## 『ことばの調べにのせて』

共催：(公財) 日韓文化交流基金

県立神奈川近代文学館、(公財) 神奈川文学振興会

創立30周年記念事業として、また第3期日韓・韓日文化交流会議のフォローアップ事業として、当基金の創立30周年にあたる2013年12月15日に、朗読会(朗読と鼎談)を実施しました。朗読会には、直木賞作家であり日韓両国で人気の江國香織さん、〈韓日文化交流会議〉の委員で作家の鄭梨賢(チョン・イヒョン)さん、〈日韓文化交流会議〉の辻原登委員が出演しました。

朗読会は、辻原登委員が館長を務める県立神奈川近代文学館の、ぬくもりが感じられる小ホールで行われ、客席は多くのファンで満席となりました。

朗読会は、日本と韓国で人気の女性作家による自作朗読と鼎談の2部構成で行われました。自作朗読では、参加者は両作家が自作をそれぞれの言語で読みあげる声に耳を傾け、テキストを目で追いました。参加者のほとんどは韓国語を解さない人たちでしたが、鄭梨賢さんの韓国語による朗読の声を聞き、テキストに記された物語の情景を頭の中で思い浮かべる、という通常では味わうことができない体験をしました。✓



短い時間に多くの思いを語りました(左から辻原委員、江國香織さん、鄭梨賢さん)。

両作家の自作朗読の後に行われた鼎談では、辻原登委員も加わり、作品や朗読に関する感想、小説を書くことや文学の意味、小説家ができることなどについて、ことばを交わしました。

朗読を終えた感想について、江國さんが作品の内容にそって旅に出たような気持ちになったと話すと、辻原委員が目から見て組み立てられる物語とは異なり、「言葉は音楽なんだ」という気がしたと応えました。そして江國さんは鄭梨賢さんの韓国語による朗読を聞き「(韓国語の語尾の)た・た・た・たという音を聞いて、きれいだと思った」と感想を述べると、鄭梨賢さんも「(日本語の)かった、かったという音を聞いていると、音楽のようだと思った」と、日々言葉を扱う3人が、朗読を通じて言葉や声、音に対するイメージを膨らませ、語り合いました。

また、3人の作家は、小説では具体化できないもの、わからなさを描くということについて話が及ぶと、「物語にすることで、ある種普遍性を持つ」など、それぞれの考えや作品の印象を語りました。

鼎談は、終始和やかで、時折会場は笑いがうまれ、参加者は出演者の話に大きくうなずいていました。参加者の一人は行事に参加し、「大きなクリスマスプレゼントをもらったようだった」と楽しげに語っていました。

朗読会の様子は、NHKニュースや『東亜日報』など、日韓両国のメディアで大きく報道されました。

なお、合同公演「えん〜縁・演・宴」と朗読会「ことばの調べにのせて」は、第3期日韓・韓日文化交流会議(2010年3月～2012年5月)が発表した「創造的日韓・韓日関係を目指して—第3期日韓・韓日文化交流会議の提言—」のフォローアップ事業として、同会議と共同で企画されました。

二つの行事は、「文化交流を通じた相互理解と信頼関係の増

進」という目的のもとで活動してきた日韓文化交流基金の創立30周年記念行事として、また、「第3期日韓・韓日文化交流会議」のフォローアップ事業として、大きな成功を収めることが出来ました。出演者、日韓・韓日文化交流会議両国委員の皆様をはじめ、今回の行事開催にご協力くださいましたすべての関係者の皆様に、深く御礼申し上げます。



### 朗読作品：

江國香織 『号泣する準備はできていた』から

「前進、もしくは前進のように思われるもの」

鄭梨賢 『今日のウン』から「三豊百貨店」

### 出演：

江國香織、鄭梨賢、辻原登



『東亜日報』報道(2013年12月16日)

「小説家、国籍違えど、物語はすべてつながっている」

# 作文コンテスト

日韓文化交流基金では、創立30周年記念事業の一環として、日韓両国の中学生・高校生を対象とした「作文コンテスト」を実施しました。「私を感じた韓国(日本)」「日韓交流について考えること」の二つをテーマに作品を募集したところ、日韓両国205名の生徒から応募があり、厳正な審査の結果、合計26名の応募者に最優秀賞を贈呈することになりました。



作文コンテスト表彰式

## ● 応募者・入選者数一覧リスト

対象部門	応募者数	最優秀賞	優秀賞
日本中学生	45名	6名	12名
日本高校生	31名	6名	11名
韓国中学生	35名	8名	10名
韓国高校生	94名	6名	12名
合計	205名	26名	45名



授賞式後に懇談する受賞者たちと鮫島章男会長



伊藤亞人評議員の話に聞き入る受賞者たち

## ● 最優秀賞受賞者リスト

### 日韓文化交流基金創立30周年記念作文コンテスト

#### ◆最優秀賞受賞者(日本側)

〈中学生〉

阿部 朱夏 蕨市立第一中学校3年  
 安 禮頌 蕨市立第一中学校2年  
 酒井 珠寿 宇都宮市立陽北中学校2年  
 須藤 里穂 日光市立豊岡中学校3年  
 根本 直哉 いわき市立平第二中学校3年  
 餅原 実紅 宇都宮市立陽北中学校2年

〈高校生〉

伊藤 駿 愛媛県立新居浜工業高等学2年  
 高橋 未夢 神田女学園高等学校2年  
 舘野 涼 福島工業高等専門学校2年  
 戸室 佳那子 神田女学園高等学校1年  
 武藤 壮平 長野県立穂高商業高等学校2年  
 匿名 都立高校2年

#### ◆最優秀賞受賞者(韓国側)

〈中学生〉

姜玟汀 光武女子中学校3年  
 金奈潤 津寛中学校3年  
 金蓮周 津寛中学校3年  
 金引徳 釜山善花女子中学校2年  
 金恵恩 耽羅中学校2年  
 芮芝熙 始興銀杏中学校3年  
 吳祥池 釜山善花女子中学校3年  
 李賢雄 津寛中学校3年

〈高校生〉

金曉珍 彌鄒忽外國語高等学校2年  
 方尹祉 狀坪高等学校2年  
 白賀媛 韓国外国語大学付属龍仁外国語高等学校1年  
 王寅瑞 慶南高等学校2年  
 李河善 安養女子高等学校2年  
 張普景 京畿外國語高等学校2年

両国の中学生・高校生からの応募作品は、いずれも日本・韓国への訪問・滞在体験や、互いの国の人との交流等、自身と相手国との関わりに基づいて綴られており、既成の概念にとらわれず、柔軟な発想で、両国の関係を前進させていきたい、という意欲が読み取れました。最優秀賞を受賞した作品数編(抜粋)を紹介します。

なお最優秀賞を受賞した両国の中高生は、それぞれ3泊4日間の日本研修旅行(2月実施)、韓国研修旅行(3月実施)に参加する予定です。それぞれの訪日、訪韓期間中には、日韓の最優秀賞受賞者同士の交流の機会や、学校訪問等が行われる予定であり、参加者の皆さんが、日韓関係の増進に対してさらに考えを深化させる機会となることを期待しています。



## 受賞作品紹介

### ◆韓国 中学2年生(日本語訳)

…まず、文化交流とは、文化の多様性と独自性を認め合いながら、相互間の理解を深めることを目的とするものである。ことば通り、お互いの文化を体験しながら親睦を図り、理解の幅を広げることだ。…お互いのことを理解することさえできれば、私たちは心を開いて手を握り合い仲よくすることができる。このようになるまでがとても大変なのである。仲よく付き合えば、お互いが持っているものを正直にさらけ出して見ることができ、もっと親しくなれば、それをお互いに分かち合うことができる。いままでになかったものを持つようになれば発展することができ、その発展を叶えるために、結局、日本と韓国の活発な文化交流が必要になるのだ。…

…過去に日本が韓国に対して、よくない印象を与えたことは事実だ。

しかし、私たちが憎まなければならないのは日本人ではなく、過去の日本の民族主義の歴史であるということを知る必要がある。過去のことだけを思い出し、現在の日本は見る必要はないとして、過去だけにこだわろうとすれば、韓国のこれからの発展はないだろう。…

文化交流をすることによって、お互いのプライドだけを強調するのではなく、お互いに足りない部分を補い合っていくことを明らかにし、国家間で起こる争いごとは、韓日両国だけではなく、東アジア全体の未来までも危うくするということを理解しなければならぬ。

韓国と日本が文化交流を通じ、国際社会の一員として協力できれば、両国のイメージは一層アップして先進国として発展し、世界的に大きく寄与することができるかと信じている。

### ◆韓国 高校2年生(日本語訳)

…お互いを結びつけるチャンネルを多様化し、結ばれたチャンネルを嘘偽りのない真心を持って維持すれば、本当の意味での交流が可能だ。しかし、現在の韓日間の交流にはどこか不自然さを感じる。特に、韓国と日本のように、過去の歴史についてお互いによくない記憶を持っている場合には、お互いを結びつけることがうまくいかず、これから新しく関係を築こうとする国との関係よりも、もっと難しいかもしれない。このような理由で多くの人々は、韓国と日本の関係を「近くて遠い国」だと言う。…

…全体的に見ると、以前に比べコミュニケーションの規模は大幅に膨らんだが、責任と真心を持ったコミュニケーションは相対的に減ってきている。…

…国家間の関係においては自国の利益を優先するため、状況によ

ては仲が悪くなることもあり、また良くなることもある。関係が悪くなったときでも、両国の関係を修復するのは相互信頼であり、その信頼は普通の平凡な人たちの間の交流から始まると私は信じている。このようなチャンネルを一つ一つ増やしなから、信頼を深めなければならないことは言うまでもない。しかし、これから私たちが大切に実践していかなければならないことは、「責任あるコミュニケーションの確保」と「交流の継続性の確保」というふたつのことであろう。私たちは自分の言動に対する責任ある態度、真心を伝えるコミュニケーションの仕方を養い、また広めていかなければならない。もう一方で、すでに行われている交流の継続を維持し、外部の要因によって左右されないように制度を強化しなければならない。…

### ◆日本 中学3年生

…日本と韓国といえば、よくニュースなどで耳にする領土問題などを例に、お互いにあまり良い印象を抱いていない人が多いかもしれません。実際に、僕もこの訪韓に参加する前は、心のどこかで韓国に対して偏見を抱いていました。

しかし、訪韓の五日目のことでした。その日、韓国の東馬中学校を訪れ、現地の中学生と一緒に授業を受け、スポーツに汗を流しました。そして、言語の壁がある中でも、簡単な英語や身振り手振りを駆使してコミュニケーションを取ることができ、とても楽しい一日を過ごすことができました。僕が一番驚いたのは、韓国の中学生がとても親切で積極的に話しかけてきてくれたことです。そこには、世間の考えなどは関係なく、一人の人として、お互いを認め合う姿がありました。…

…このように、訪韓という体験を通して、僕の中で韓国に対する印象が良い方向に変わりました。今なお、当時知り合った友達との交

友は続いています。

今日の国際社会はグローバル化が進んでいます。もし、国同士が何の関わりも持たない鎖国的な考えだとしたら、たしかに争いや問題は何一つ起きないでしょう。しかし、国同士が共に発展していくために、そして永久の目標である平和のために協力していくことは必要不可欠です。日本と韓国を例にとっても、隣国として協力してこれからの国際社会をリードしていくべき立場にありながら、このように問題が絶えません。…私は、第一にお互いを認め合うことが大切だと考えます。このように国際社会の関係について考えたとき、身近な例として普段の人間関係があてはまると思います。人付き合いというものは、相手を知り、相手の良さも悪さも認め合い、心を開いて受け入れることから始まります。この延長線上に国際社会があるにすぎません。…

### ◆日本 高校2年生

私は、学校の選択授業で毎週二時間、ハングルの勉強をしている。私がこの授業に参加した理由は、韓国と日本の関係をもっと知りたいと思ったからだ。

…在日韓国人について調べて、自分の無知さにもこれらのことが知れ渡っていない日本にも驚いたし、こういった韓国との関係を知る日本人が少ないということが、韓国と日本との間の問題を大きくしている原因のひとつなのではないかと感じた。また、日本人のイメージする韓国や韓国人像に、無知であるが故の偏見が含まれているのかもしれない

と考えた。そうだとすれば、いつまでも何も知らない日本人でいるのは、韓国に対して失礼である。

韓流ブームや竹島問題などで色々な方面から韓国への関心が高まっている今こそ、二国間の問題について知ることのできる環境があるべきだ。何も知らないまま、また、間違った認識のままに、良い関係が築かれることはないだろう。日本と韓国がお互いに嫌い合っていて、その原因が過去の歴史にあるというなら、その歴史は避けられるべきではなく二国間で話し合われるべきだ。…

当基金は、昨年12月15日で創立30周年を迎え、近く30年史を刊行する運びとなりました。本稿では30年史の内容を紹介しつつ、文化交流の歩みを通して日韓関係の変遷を概観します。

## I 設立の経緯

当基金は、未来志向的な日韓関係を築くためには、国民レベルの文化交流を増進しなければならないとの日韓・韓日両議員連盟の提案により、両国経済界の支援を受けて韓日文化交流基金と同時期に誕生した。日韓関係が紆余曲折を繰り返す政治状況を見るにつけ、日韓関係の将来を見据えた先人の慧眼と勇断に対し尊敬の念を禁じ得ない。

異文化間の交流はお互いに認識のズレもあり、特に日韓関係は過去史という負の遺産を引きずっていることから、今後も政治的葛藤から逃れることは難しい環境にあるが、相互理解と信頼関係を構築するうえで文化交流に勝る手段は他に見当たらない。また、文化交流の領域は、政治的緊張関係から超然とした立場を堅持する必要があり、当基金の存在意義と役割も正にそこにあると思う。

## II 沿革

### 1. 草創期(1983～1988年)

基金創立後は限られた自主財源の下で、民間の交流団体に対する小規模な助成等を行うほか、1986年度から韓日文化交流基金と共同で「日韓・韓日合同学術会議」を開催した。

### 2. 「日韓学術文化青少年交流共同事業体」としての歩み(1989年度～現在)

基金は、1989年度から日韓両政府が策定した「日韓学術文化青少年交流事業計画」の下で「日韓学術文化青少年交流共同事業体」の日本側事務局に指名され、各種交流事業に取り組むことになった。青少年交流事業は、同共同事業体の韓国側カウンターパートである国立国際教育院と共同で教員、大学生及び中高生(1999年度から)の訪日・訪韓事業を実施しており、そのための事業経費は日韓両政府が毎年拠出している。

また、基金は1990年代半ばから政府の委託を受けて、日韓間の各種の学術・文化会議の事務局業務を行っている。このほかに、日韓の研究者を対象としたフェローシップや草の根交流等に対する助成事業を実施している。

## III 事業概要

### 1. 青少年交流事業

青少年交流事業は、次代を担う日韓の青少年を対象に訪日・訪韓を通じて相手国の社会に直接触れ、人々と交流することにより相互理解を深めてもらうために、ホームステイや学校訪問、施設見学、文化体験等のプログラムを実施している。

## 日韓文化交流基金30年史 目次

ご挨拶  
祝辞

### I 基金30年の歴史

1. 草創期(1983～1988年)
2. 「日韓学術文化青少年交流共同事業体」としての歩み(1989年度～現在)
3. 財務状況

### II 理事会・評議員会の活動状況(1983年度～現在)

### III 事業概要

1. 青少年交流事業
2. 会議事業
3. フェローシップ
4. 助成事業
5. 広報事業
6. 基金訪韓団・基金賞
7. 賛助会員制度
8. 翻訳図書出版事業
9. 図書センター(閉鎖)

### IV 基金創立30周年記念事業

1. 日韓の女性作家による朗読と鼎談
2. 日韓の芸術家による合同公演
3. 日韓の中高生作文コンテスト入賞作品

### V 寄稿

### VI 附録



皆さんの笑顔で歓迎の安芸太田町のみなさん 韓国青年訪日団(2013年8月)



青少年交流事業は、韓国国立国際教育院と共同で実施している毎年の交流事業を中核に、1989年度から累積で約3万名の日韓の青少年の招聘・派遣を実施してきた。

青少年交流は近年、①2007～2011年度の「JENESYS」事業(交流実績:9,807名)、②2012年度のキズナ強化プロジェクト(交流実績:1,632名)、③2013年3月からのJENESYS 2.0事業といった政府施策の下で活発に推進されている。

日韓関係は長い間、政治的な関係が悪化すると民間レベルの交流が影響を受けるという悪循環を繰り返してきたが、近年の日韓関係は多層的・重層的になっている。政治的懸案により民間レベルの交流が影響を受ける事態は顕著に低下している。日韓関係が外交的・政治的に緊張している昨今でも、当基金の青少年交流事業は原発の汚染水問題による影響は別として順調に推移している。

## 2. 会議事業

学術・文化会議事業は、青少年交流事業と双璧をなす当基金の事業であるが、基金創立後いち早く1986年度から韓日文化交流基金と共同で学術会議を開催したほか、1990年代半ば以降は、村山総理談話に基づく「平和友好交流計画」等の政府施策や「日韓パートナーシップ宣言」(1998年)をはじめとする日韓首脳会談の合意を受けて発足した各種の学術・文化会議の事務局業務を行っている。

### (1) 日韓・韓日合同学術会議

当基金と韓日文化交流基金は、日韓関係史を中心に両国の研究者の発表・討論の場として、1986年から2001年まで14回にわたり、「日韓・韓日合同学術会議」を共同で開催した。学術分野での交流が少なかった時期に、民間主導で幅広いテーマについて学術討論の場を提供したことは画期的な試みであった。同会議の成果については、「日韓・韓日合同学術会議記録」という形で整理されている。

### (2) 日韓地域間交流促進のためのセミナー

日韓間の地域レベルの交流を促進することを目的に、韓国に対する理解を深めるための「日韓地域間交流促進のためのセミナー」を開催した。対象は、国内の地方自治体や民間交流団体の関係者で、1989年の九州地域を皮切りに北海道まで日本各地を巡回しながら11年間にわたり計8回開催した。

1980年代末の日韓の姉妹都市提携は30件程度で、韓国との交流が未だ活発でなかった。その後90年代に入って新たに50近くの自治体が韓国と姉妹(友好)都市関係を締結することになったところ、「日韓地域間交流促進のためのセミナー」を日本各地で開催したことは、時代の要請に応える施策であった。

### (3) 日韓共同研究フォーラム(1996～2004年度)

日韓共同研究フォーラムは、村山総理談話(1994年8月31日)に基づくアジア近隣諸国との「平和友好交流計画」の一環として発足した。これは、10年間に延べ200名の日韓の研究者が参加した大規模な共同研究プログラムであり、その後の日韓の共同研究事業の先駆けとなった。研究の成果は、「日韓(韓日)共同研究叢書」(全21巻)として刊行された。



日韓共同研究叢書全21巻(慶應義塾大学出版会)

### (4) 日韓文化交流会議(1999年度～2012年度)

[第1期:1999～2002年、第2期:2004～2007年、第3期:2010～2012年]

1998年10月の日韓首脳会談(小淵総理・金大中大統領)において、過去の両国関係を総括し未来志向的な関係を発展させるための「日韓パートナーシップ宣言」が採択された。

同宣言は、日韓の文化交流・青少年交流が活性化する転機となった画期的なイベントであった。日韓文化交流会議は、同宣言を踏まえて発足したものであるが、2002年のサッカー・ワールドカップの日韓共催や「日韓国民交流年」(2005年)を契機に交流事業について具体的な提案を行ったほか、長期的な観点から日韓の文化交流について提言を行うなど、「文化を通じた日韓関係の進展」に大きな役割を果たしたといえる。

### (5) 日韓歴史家会議(2001年度～現在)

1996年6月の日韓首脳会談(橋本総理・金泳三大統領)の合意に基づき、日韓の歴史研究者が幅広い意見交換をする交流の場として設立された。「日韓歴史共同研究委員会」が専ら日韓の歴史を対象にしているのに対して、「日韓歴史家会議」は、日本史・韓国史のみならず東洋史、西洋史など様々な地域と時代を対象としているのが特徴である。

### (6) 日韓歴史共同研究委員会(2002年度～2009年度)

2001年3月に発生した「教科書問題」を契機に、同年10月



の日韓首脳会談(小泉総理・金大中大統領)の合意により、両国政府が立ち上げた大規模な共同研究機構である。第1期の共同研究委員会は古代史、中近世史及び近現代史の3分科会、第2期の共同研究委員会はそれらに教科書小グループを加えた4分科会の体制で、分科会ごとに日韓関係史の共同研究を行った。

第1期(2002年度～2005年度)及び第2期(2007年度～2009年度)とも、それぞれ「日韓歴史共同研究報告書」全4巻を公開している。

### (7) 日韓新時代共同研究プロジェクト (2008年度～2012年度)

2008年4月の日韓首脳会談(福田総理・李明博大統領)において、「国際社会に共に貢献する日韓関係」をテーマに、国際政治・経済分野を含む多様な分野の日韓の専門家が共同研究を行う「日韓新時代共同研究プロジェクト」を開始することに合意した。

第1期プロジェクト(2008年度～2010年度)は、報告書「日韓新時代のための提言」を日韓両政府に提出した。

第2期プロジェクト(2011年度～2012年度)は、2011年10月の日韓首脳会談(野田総理・李明博大統領)の合意を受けて発足し、7つの研究テーマについて研究を行い、「新時代の日韓協力—七つの革新的アジェンダー—」と題する報告書を日韓両政府に提出した。

### 3. フェローシップ

当基金は、日韓の中堅・若手研究者の相手国での滞在・研究活動を支援する学術研究者交流事業(フェローシップ)を1989年度以来実施しており、これまでの実績は、2013年度迄に招聘が604名、派遣が70名に上る。招聘・派遣フェローの研究成果をとりまとめた論文集は、訪日学術研究者論文集が19巻、訪韓学術研究者論文集は13巻を数える(2014.2現在)。

### 4. 助成事業

民間交流に対する助成事業は、基金創立当初から実施している事業であるが、政府予算により本格的に実施することになった1989



日韓こども湿地交流(2011年12月)－助成事業－  
韓国固城市のクロハゲワシ保護地での生態観察－NPO法人 藤前干拓を守る会

年度以来、累計で約1200件の民間交流事業を助成している。

助成対象は、草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流、学術定期刊行物出版に対する支援のほか、民間の交流事業に対する後援名義付与となっている。

### 5. 基金の自主事業

当基金は、政府拠出金による各種交流事業の他に、基金の基本財産の運用益と賛助会費による自主財源により、次の事業を実施している。

#### (1) 基金訪韓団・基金賞

##### ① 基金訪韓団

日韓関係の重要性について認識を深めてもらうために、1984年5月に経団連傘下の経済団体の役員に呼びかけて韓国訪問団を編成したのが基金訪韓団の始まりである。爾来、毎年、これまで29回にわたり基金役員を中心とした代表団の韓国訪問を行っている。

基金訪韓団の事業は、姉妹関係にある韓日文化交流基金との間の例年の交流事業となっているほか、韓国側関係者との面談、在韓日本大使館・日本人特派員・商工会関係者等のほか当基金フェローOBとの懇談を通じて、日韓関係の現状について知見を得る貴重な機会となっている。

##### ② 日韓文化交流基金賞

1999年以来、学術・文化交流に貢献した韓国人を表彰する「日韓文化交流基金賞」の授賞式を基金訪韓団の際に行っている。2013年の第13回まで、39名の個人と2団体を表彰している。受賞者は、研究者、交流団体・マスコミ関係者、映画監督、音楽・芸術家、スポーツ選手等多岐にわたっている。

#### (2) 賛助会員制度による事業

賛助会員制度は、基金の自主財源確保のため基金の事業趣旨に賛同していただける有志に呼びかける形で2005年に発足した。

賛助会費は、基金主催の専門家による講演会(計14回開催)及び民間の文化交流活動に対する助成事業に充当されている。講演会は、学術的テーマのほかにドラマ、映画、文学等様々なテーマを企画しており、参加者の好評を得ている

賛助会員制度は、基金に対する貴重な財政的支援として、また日韓の文化交流に対する会員各位の参加意思の表明として基金の活動を支えている。

## 6. 基金創立30周年記念事業

昨年12月に日韓文化交流会議とタイアップする形で、下記の30周年記念事業を実施した。偶々、日韓関係が政治的にギクシャクしている時期に当たったが、文化交流の重要性を内外に発信する機会になった。

### (1) 日韓の女性作家による朗読と鼎談

日韓文化交流会議を支援する形で2013年12月15日に県立神奈川近代文学館において、日韓両国の人気女性作家(直木賞作家の江國香織氏と現代韓国を代表する作家鄭梨賢氏)による自作朗読と鼎談が行われた。鼎談では神奈川近代文学館館長で日韓文化交流会議の委員でもある辻原登氏が司会を務めた。

### (2) 日韓の芸術家による合同公演

当基金と日韓文化交流会議と共催で、日韓のアーティスト30余名が参加した多彩な芸術公演が2013年12月17日、東京の韓国文化院で開催された。

### (3) 日韓の中学生作文コンテスト

日韓の中学生・高校生を対象に「作文コンテスト」を実施したところ合計205名の応募があり、入賞作品のうちから10点を選んで30年史に掲載したが、現在の硬直した日韓の政治状況の下でも、日韓の中学生が柔軟な思考で日韓関係に向き合っている姿勢が作品から伝わってくる。

## 7. 附録

附録として、基金設立趣意書をはじめ「日韓学術文化青少年交流事業計画」、「村山総理談話」、「平和友好交流計画」、「日韓パートナーシップ宣言」、「JENESYS」、「日韓文化交流会議」の提言等、各種の関連資料をとりまとめた。

## 日韓関係の変遷と基金事業

1981年	日韓・韓日議員連盟合同総会(第9回)(9月17日)
1983年	日韓文化交流基金設立(12月15日)
1986年	日韓・韓日同学術会議(第1回)～2001年度(4月)
1988年	ソウル・オリンピック
1989年	日韓学術文化青少年交流共同事業体設立(5月)
1993年	宮沢政権、河野官房長官談話(慰安婦問題)(8月4日)
1994年	村山総理談話(8月31日)
1995年	村山総理談話(戦後50周年)―「平和友好交流計画」(8月15日) 日韓共同研究フォーラム開始―1995～2004年度
1998年	日韓パートナーシップ宣言:日韓首脳会談(小淵・金大中)(10月8日)
1999年	日韓文化交流会議(第1期)発足(6月)
2001年	「新しい歴史教科書」の検定に韓国が反発(5月) 日韓歴史家会議発足(11月22日)
2002年	日韓国民交流年・サッカーWC日韓共催 日韓歴史共同研究委員会(第1期)発足(8月)
2004年	日韓文化交流会議(第2期)発足(6月)
2005年	日韓友情年(日韓国交正常化40年)
2007年	21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)開始(4月) 日韓歴史共同研究委員会(第2期)発足(6月20日)
2009年	日韓新時代共同研究プロジェクト(第1期)発足(2月23日)
2010年	日韓文化交流会議(第3期)発足(6月)
2011年	日韓新時代共同研究プロジェクト(第2期)発足(12月12日)
2012年	キズナ強化プロジェクト開始(4月)
2013年	JENESYS 2.0 事業開始(3月) 日韓文化交流基金創立30周年(12月15日)

## 編纂を振り返って

30年史の編纂を終えて実感したのは、30年史は単なる当基金の事業の足跡にとどまらず、日韓の青少年交流・学術文化交流の歴史を記録した文書でもあるということです。また、基金の交流事業の多くが村山総理談話や日韓パートナーシップ宣言等の日韓首脳会談の合意に基づいて実施されていることもあり、30年史は日韓関係の変遷を反映している側面も持っています。

30年史の中でもハイライトというべき部分は、30周年記念事業として実施した日韓の中学生の作文コンテストの作品ではないかと思われます。それらの作品を読むと、日韓関係に対して若い世代が既存概念にとらわれずに柔軟で前向きな考えをもっている

ことに驚かされ、教えられる点も少なくありません。基金30年史及び中学生の作文集については、基金ホームページ等で公開する予定です。

国交正常化50周年を明年に控えた時期に、日韓関係が政治的・外交的軋轢から首脳会談開催の見通しも立たないという非正常な関係が続く中で、30年史が刊行される意義は大きいと思います。駐韓大使を歴任した基金の初代理事長須之部量三氏は「日韓関係に問題はつきものである。問題が起きても感情的な対立に発展しないよう、双方が冷静に問題を処理していくことが望ましい」旨述べたことがあります。相互理解を深め信頼関係を構築していく上で文化交流が果たす役割は大きいといえます。(文責: 参与 阿部 孝哉)



# 第13回日韓歴史家会議 「世界史の中のイスラーム」

2013年10月25日(金)から27日(日)の3日間、東北亜歴史財団(ソウル)にて、第13回日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足しました。日本史、韓国史のみならず、幅広い分野の歴史研究者が年1回の会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに意見交換と討論を行っています。



第13回日韓歴史家会議(全体写真)

今回は大主題「世界史の中のイスラーム」のもとで、「イスラームをどう見るのか?」、「イスラームとヨーロッパ・アフリカ」、「イスラームとアジア」を小主題に設定し、各セッションでの報告と討論において活発な議論が展開されました。

10月25日(金)には講演会「歴史家の誕生」を開催し、濱下武志(東京大学名誉教授)と閔賢九(高麗大学校名誉教授)が、研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となった出来事などについて語りました。

## 参加者

### ■日本側(敬称略、五十音順)

板垣雄三(東京大学名誉教授、イスラーム学)、臼杵陽(日本女子大、現代イスラーム社会)、加藤博(一橋大、19世紀エジプト史)、小林寧子(南山大、インドネシア近現代史)、坂井信三(南山大、西アフリカ史)、高山博(東京大、西洋中世史)、浪岡新太郎(明治学院大、政治社会学・比較政治学)、羽田正(東京大、ペルシア建築史)、濱下武志(東京大学名誉教授、アジア近代史)、宮嶋博史(成均館大、朝鮮史)

### ■韓国側(敬称略、カナダラ順)

姜日休(水原大、西洋中世史)、金光億(ソウル大、文化人類学)、金伯哲(ソウル大、朝鮮時代史)、金榮漢(西江大学校名誉教授、西洋思想史)、金容右(韓国教員大、西洋現代史)、金學俊(東北亜歴史財団理事長、政治外交学)、金亨俊(江原大、文化人類学)、金浩東(ソウル大、中央アジア史)、南文鉉(建国大学校名誉教授、韓国科学史)、閔賢九(高麗大学校名誉教授、高麗時代史)、朴檀(西江大、フランス現代史)、裴京漢(新羅大、中国現代史)、徐榮健(釜山大、スペイン史)、宋相庸(翰林大学校名誉教授、科学・自然哲学)、吳明錫(ソウル大、東南アジア文化)、禹成昉(東北亜歴史財団運営委員、中国古代法制史)、劉仁善(前ソウル大、東南アジア史)、李圭哲(カトリック大、朝鮮前期史・国際関係)、李泰鎮(ソウル大学校名誉教授、韓国政治史・社会史)、鄭在薰(慶北大、朝鮮後期史・思想史)、車河淳(西江大学校名誉教授、西洋思想史)、洪仙伊(高麗大、歴史教育・朝清関係史)

## 日程

10/25 (金)	<p>日韓歴史家講演会「歴史家の誕生」 司会：裴京漢(新羅大) 閔賢九(高麗大)「韓国史学の成長と苦悶を見つめながら」 濱下武志(東京大)「朝貢システム論から見る東アジア」</p>
10/26 (土)	<p>1: 基調発表「イスラームをどう見るのか?」 司会：金榮漢(西江大) 報告：車河淳(西江大)「一般史におけるイスラーム：真実と偏見」 加藤博(一橋大)「世界史の中のイスラーム」 全体討論</p> <p>2: 「イスラームとヨーロッパ・アフリカ」 司会：姜日休(水原大) 報告：朴檀(西江大)「フランス共和国とイスラーム：校内ヒジャブ着用禁止事件を中心に」 徐榮健(釜山大)「中世スペインの「再征服(Reconquista)」とムスリム女性のイメージ」 高山博(東京大)「文明の十字路：中世シチリア」 坂井信三(南山大)「西アフリカのイスラームと人種表象」 討論：金容右(韓国教育大) 浪岡新太郎(明治学院大)</p> <p>3: 「イスラームとアジア」 司会：劉仁善(ソウル大) 報告：吳明錫(ソウル大)「東南アジアのイスラームとグローバルイスラムネットワーク」 南文鉉(建国大)「朝鮮初期の科学とイスラーム」 羽田正(東京大)「空間概念の歴史の意味とイスラームへの東方への伝播」 臼杵陽(日本女子大)「イスラームとアジアー日本との関連で」 討論：金亨淳(江原大) 小林寧子(南山大)</p>
10/27 (日)	<p>4: 「世界史の中のイスラーム、その研究の方向」 司会：金浩東(ソウル大) 総合討論</p>



第13回日韓歴史家会議(総合討論)

# 朝鮮半島における流行小説の源流

テーマ企画「源流シリーズ」第二弾として、富山大学人文学部で朝鮮言語文化の教育に携わる和田とも美さんをお招きし、「朝鮮半島における流行小説の源流」についてお話をうかがいました。〔2013年12月9日(月) 日韓文化交流基金会議室〕

## 1. 廉価本の登場

今日は、日本では研究者以外にはあまり知られていない、1900年代初頭の朝鮮半島の文学についてお話しします。20世紀に入って欧米式の印刷機械が朝鮮半島にも持ち込まれ、粗末な紙に針金でとめられた廉価な冊子が出回るようになります。外国語の学習書、漢字や『小学』のような教養書、手紙の文例集や『農業大要』のような実用書、『伯林巴里』のような外国案内等、多様な本が出版されました。

文学では、古典小説の再話、『三国志』など中国文学の抄訳、笑い話、詩歌集、新しく創作された小説などが刊行されました。新しく創作された小説には「新小説」、古典小説の再話には「古代小説」と表示されていました。「新小説」の嚆矢として有名なのが『血の涙』です。最初の新聞連載ではハングル漢字混合文で、いくつかの漢字にはハングルで訓読みが併記されていました。作者の李人植は、いろいろな点で日本の方法を朝鮮半島でも導入してみたい、という気持ちの強い人でした。ただこの訓読みのふりがなは漢字ハングル混合文には適しておらず、定着しませんでした。日本と朝鮮半島のことばはよく似ていると言われますが、こうした表記の点からも実はかなり違うものです。



和田とも美講師のお話聞き入る聴衆

## 二つの『血の涙』

この『血の涙』には参照されたことの明らかな日本の作品があります。村井弦斎の『血のなみだ』(1896)です。李人植の『血の涙』は、平壤で母が日清戦争の混乱の中で見失った娘を捜し歩く、という悲しい場面から始まります。一方、村井弦斎の『血のなみだ』は、父親を亡くした娘が、涙にくれている母を慰める為に花を探し回っている、という場面から始まります。父は日清戦争に参加し、その戦後処理に憤り、戦地で抗議の割腹自殺をしました。

どちらも主題は「憂国」です。国の現状に鑑みて、自分はどのよ

うに生きれば良いのか、という問いが繰り返されます。日本の『血のなみだ』は、前年の三国干渉への憤りを吐露し、外交力と軍事力を高めることを主張するもので、当時の北東アジアにおける日本の置かれた状況と直接的に関わっています。それぞれが国に奉仕する為に各地におもむいて結末となります。『血の涙』もまた、同じく国の現状を憂い、日本と満州、朝鮮が連合を組むことを主張する部分があります。ただ登場人物がその為に具体的な行動をとるわけではなく、教育によって国の力を高めることを訴えるという、穏当な結末がついています。また婚約という華やかなエピソードも付け加えられています。

それでも、当時の大韓帝国が置かれていた状況を考慮すれば、意外に強いメッセージが込められています。まず、日本は通過地点に過ぎないように描かれている点です。青年、具完書は渡米して学問を修めようと家出し、日本を通過中に玉蓮と出会います。玉蓮は具完書に誘われ、共に渡米します。玉蓮の父もまた、国のために渡米して勉学中でした。

作者の李人植は親日的な人物と評されることが一般的ですが、この作品が発表された当時、既に朝鮮半島は日本の統監府の管理下に入り、外交権も失なっていました。その状況下で、日本を単なる通過地点として描き、世界に視野を広げて行こうと呼びかける作品を発表したことは、非常に強いメッセージが込められているものと受け止める必要があります。

## 3. タクチ(딱지)本の時代

『血の涙』の頃はまだ、表紙はおとなしいものでしたが、1910年代に入ると、「タクチ本」と呼ばれるように、華やかな色刷りの表紙が表れ始めます。「タクチ」は子どもの遊ぶメンコを意味します。

「新小説」には、国外の小説の抄訳や翻案も多く含まれる一方で、1910年代以降になると、朝鮮半島の内部に取材された物語が主流になっていきます。その筆頭格が『康明花傳』です。『康明花傳』とは、1923年に実際にあった事件をもとに、1925年から1970年にかけて何種類も出版された物語です。映画では、1924年に日本人の早川増太郎監督が製作した朝鮮映画『悲恋の曲』が、この事件を題材にしたものです。韓国人による映画は1967年に製作されています。

康明花とは実在した妓生の名前で、その来歴は、自殺当時の新聞記事によってかなり明らかにされています。父親は貧民で放蕩者、母親は名家の出身でした。没落した名家から貧家に嫁に出され、そこで生まれた娘が康明花です。母親は娘を貧家で育てるより、妓生に出すことを決意します。康明花はすぐに平壤随一の妓生となり、富豪の一人息子と恋愛関係になります。

この2人からすぐに連想されるのは朝鮮半島の古典小説『春香傳』です。『春香傳』は、繰り返しリライトされて今でも突出して知名度の高い物語です。一方の『康明花伝』は、1970年に廉価本として出版されたのを最後に、急速に忘れられました。ところ



が1920年代から70年にかけては、『春香傳』と同等の存在感を示すほどの流行小説でした。ハッピーエンドの『春香傳』の対極として、『康明花伝』は男女2人とも自殺という結末です。

#### 4. 1920年代から70年まで流行小説であり続けた『康明花傳』

最初に『康明花傳』が刊行されたのは1925年で、康明花が幽霊となって現れるところから始まります。この部分は小説化された際に付け加えられたものです。実際の事件をもとにしながら幽霊話から始まるというところが、この物語が朝鮮半島の物語の歴史をきちんと受け継いでいることを示しています。朝鮮半島の物語の根底にあるのは、ムーダン(巫堂：霊媒師)による死者をなだめる為の歌舞だと言われています。『春香傳』もまた、無念に死んだ妓生の魂をなだめる話から発生したという説があります。この二つの物語はその構造を共有しています。まず男性側は特権階級に属し、女性側は、両班と下層階級の境界線上にいる人物であるという点です。そしてこの恋愛が、男性側の家の理解を得られないことも同じです。

康明花は平壤随一の名妓として実家の生計を支えていました。ところが張柄天との出会いによって妓生を辞め、無収入になりました。この点でも、春香の家が、退妓である母の蓄えで暮らし、春香の良縁に将来の生活の全てをかけていることと同じです。ところが康明花には『春香傳』的結末は用意されませんでした。『春香傳』の場合、男性が生活力を手に入れた後に、春香を迎えました。

一方、康明花たちは、恋愛の情に駆り立てられるだけで何の方策もありません。その結果、結局は親の経済力にとりこまれてしまいます。もっともこれは当事者の能力の問題とばかりはいえません。

『春香傳』の背景には、男性の出世コースが明確だという前提がありました。李夢龍のように高級官僚の子弟であれば、科擧で良い成績をとりさえすれば、相当な権力を手に入れることができます。主席合格して暗行御使となった時点で、彼は地方長官の不正を処分し、捕らえられていた春香を救出できるほどの権力を手に入れていました。

康明花事件の1920年代初頭、植民地となった朝鮮においては、男性の出世コースは不確定化しました。四書五経重視のそれまでの学問に代わって、新学問が重視されるようになります。また学歴も必要になりますが、朝鮮半島内では高等教育機関が不足しており、多くの若者が日本等へ渡りました。異郷への留学は、それまでのように家で書物に向ってきた科擧の準備とは、全く違った行動力が必要になります。

一方、女性の置かれた状況も変わりました。春香の場合、その血筋的条件のために、男性の出世の後ろ盾になることはできませんが、良家から正妻を迎えて一族の繁栄を維持する夢龍に異議を唱えない代わりに、当事者の意思による恋愛という、望ん

でいた良縁を実現させることができました。それが彼女の境遇に許された最大限の自己実現でした。

1920年代前後は、朝鮮半島において「自由恋愛による婚姻」が、理想として叫ばれた時代でもあります。といって妓生との恋愛から婚姻に至ることは、その理想の圏外にありました。つまり、かつて恋愛の担い手であった妓生たちが、一夫多妻制から開放されると同時に、むしろ恋愛から排除されていくことになったのです。

ある種の自由が強調されていく中で、その自由の享受を許されないグループが新たに作られて排除されて行く過程、『康明花傳』はそれを示しています。1970年代までこの物語が享受され得たのは、新しい秩序の形成過程で排除された者たちの訴えを後世に伝える、という朝鮮半島の物語の役割が、まだ生きていたことを示しています。

1920年代の後半になると、女学生が登場する物語がタクチ本に多く表れ始めます。といっても華やかさはありません。女学生間の経済格差、修学後の進路は結局は婚姻というやりきれなさ、かつて抗日運動に参加して今は将来の見通しも無い空しさ、そうした状況乗り越えるすべの無い無力な人々の暗い表情が、淡々と描写されていきます。

タクチ本は1970年を最後に出版が途絶えました。文壇で評価される作品とはまた違った役割をひきうけていたものと思われる。時代に即応し、その感覚をとりこむというその役割は、恐らくはテレビに吸収されていったのでしょうか。1990年代まではまだ、古書店などに束で捨て値で売られていました。価値を認められるようになったのは、2000年代に入ってからです。富山大学でもまとまった金額で購入しましたが、日本に流出してしまったことには批判もありました。ただ、現在では電子化してインターネット上で公開することが可能になりました。どこで所蔵するかはもうあまり問題にならないのかもしれませんが。



『新小説 牡丹屏』表紙  
富山大学附属図書館所蔵

#### 和田とも美

東京外国語大学外国語学部朝鮮語学科にて朝鮮語の学習を始めると同時に、大学院博士前期課程にかけて近代朝鮮文学を学ぶ。1995年9月～1999年3月、ソウル大学大学院博士課程留学、単位取得修了して帰国、1999年4月から富山大学人文学部にて朝鮮言語文化の教育に従事。2007年博士学位取得(ソウル大学)。著書に『李光洙長篇小説研究—植民地における民族の再生と文学』御茶の水書房2012年。

## PROFILE

## 初めての受け入れ

財団法人釜山国際交流財団(以下BFIA (Busan Foundation for International Activities)の略)から、2013年度に韓国から学生(10名程度)の訪日を検討しており、その際大阪でのホームステイ受け入れに協力いただけないかという話が2013年4月に入ってきました。BFIAが設立されたのが2006年、その際私も大阪国際交流センターを視察されたことを契機に、情報交換などの交流はしてはいましたが、人的交流は初めてということもあり、受け入れの検討をしていたところ、公益財団法人日韓文化交流基金から「JENESYS2.0」での公募の情報をいただき、このプログラムを活用して、想定以上の韓国青少年の受け入れができるのではと考え、応募することにしました。

ただ、応募の条件として、招へい人数50名程度。この人数は、これまで受け入れた経験がなく、また当財団が主催して韓国からの受け入れをするのも初めてで、不安な面もありましたが、これまでの受け入れ経験を活かして、計画を立てることにしました。

## 新たな発見を楽しんでもらえたプログラム

今回の招へいでは、中学生、高校生、大学生の計41名を混成チーム3つに分け、各チームで行動し、「ふりかえり」でもチーム別に発表してもらうという設定にしました。

まず、日程の計画にあたっては、日本を訪れるのに一番いい季節は・・・暑くても、寒くてもと思い、'秋'にし、9月末からの日程で準備しましたが、最近では9月末といっても地球温暖化の影響でしょうか、夏が続いているような日々でした。そんな中、来日した「韓国青少年グループ招へい研修団」は、期待と好奇心に胸ふくらませ釜山を出発したと思います。

今回は、「JENESYS2.0」の目指す「日本への関心の増進」、「日本的な価値への国際理解増進」という点に重点を置き、研修団をはじめ、プログラム実施にあたり協力いただく学校、機関、企業、ホストファミリーの皆さまにも、相互に交流・理解が深まる内容であってほしいと考え、10日間のプログラムを企画しました。

特に、今回応募の際にテーマとした「大阪のモノづくり」については、大阪の中小企業に関するレクチャーや町工場訪問をはじめ、せっかくの機会だからと、これもあれもと欲張ったスケジュールになってしまいましたが、一人ひとりの感想を読み、また韓国での報告会での意見交換で、ハードスケジュールに不満もなく、新た

な発見を楽しんでもらえたようです。

滞在中、宿舎へ戻ると毎日ミーティングを行い、帰国前日に行った「ふりかえり」の発表でのプレゼンテーションは、各チームの特色が生かされた内容であり、また、さすが「IT先進国」といわれる韓国の学生たちの作成技術と能力に驚かされました。

## 交流は国際理解、国際平和につながる

プログラム終了後のアンケート、帰国後の「報告会」での発表、韓国側制作の報告書により、参加者各人の気づきがあり、一番印象深かったと感想の多かった「ホームステイ」で今後もホストファミリーとの交流を続けて行きたいということが、既にも実践されているとともに、日本との交流に積極的に関わってこうとする姿勢がうかがわれ、一定の成果があったと思っております。

今回のプログラムは、彼らが今後の日韓のかけ橋になるきっかけづくりであり、今後も引き続きこのようなプログラムを実施することにより人的交流から、国際理解ひいては国際平和につながるように願っております。また、当財団も未来の世界を支える青少年の交流事業を今後も引き続き行っていきたいと考えています。



「ふりかえり」発表(10月2日)



報告会・歓送会ホストファミリー・訪問先関係者と共に(10月2日)



大阪市役所表敬訪問(9月26日)

いずみか  
泉井実香

## PROFILE

公益財団法人大阪国際交流センター情報企画部事業担当グループリーダー。1987年財団法人大阪国際交流センター設立時に勤務、施設担当、インフォメーションセンター担当、企画担当を経て現在に至る。



# 友情深めた「日韓誠信学生通信使 2013」 ——「互恵・共生・平和」テーマに交流

早稲田大学アジア研究機構  
日韓未来構築フォーラム主宰  
小田川興

「誠信」とは江戸時代、朝鮮通信使の接遇役として韓国で評価が高い儒学者・雨森芳洲の外交哲学であるが、それを礎に早稲田大学アジア研究機構は高麗大学と共同で「日韓未来構築フォーラム—誠信学生交流」を2009年から実施し、豊かな成果を挙げてきた。

日韓関係は韓流ブームが定着し、経済関係も拡大が続いている。しかし、歴史、領土問題や在日韓国・朝鮮人を排撃するヘイトスピーチの問題も起きるなど、その溝はむしろ広がっている面もある。

このような現状を踏まえて、2013年の交流はこれまでより領域を広げ、日韓が文化や経済のソフトパワーを活用して互恵関係を築きながら懐の深い「和解と共生」の道を開く契機をつくることを目的に「日韓誠信学生通信使2013——互恵・共生・平和への旅」とした。幸い、「JENESYS2.0」に選ばれ、12月22日～29日、両大学の学生・教職員計約50人が広島、京都、滋賀を歩いた。早稲田チームには慶應大、ICUなど他大学生4人のほか、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターと連携する広島経済大学生6人も参加した。

交流のテーマは3つ。▽在韓被爆者問題を通して日韓の近現代史を学び、「核時代」の日韓の平和と共生を考える。▽朝鮮通信使の足跡をたどり、「誠と信義」の外交精神を学ぶ。▽世界遺産、アニメ、グルメなど「クール・ジャパン」を体験し、日本の経済再生への布石を理解して互恵・共生・平和の未来像を考える——。各テーマに沿って訪問・見学は世界遺産の原爆ドームと宮島、広島平和記念資料館、京都では清水寺や金閣寺、韓国の国民詩人・尹東柱の詩碑、そして滋賀県高月町の雨森芳洲庵など18か所にぼった。呉市の朝鮮通信使資料館では植民地期「朝鮮の土になった」浅川巧ゆかりのチョウセンゴヨウを、被爆二世の辛亨根広島総領事とともに記念植樹した。日韓の「課題解決」をめざして核エネルギー、歴史問題などを議題に4回、交流・討論会を重ね、率直ながらバランスのとれた論議が展開された。

新鮮だったのは「クール・ジャパン」体験で、京都精華大学の国際マンガミュージアムではアニメ制作に挑戦。奇跡的なJAL再建を実現した稲盛和夫名誉会長の京セラ本社も見学。日本語・日本文化を学ぶ高麗大の参加者から「日本の情緒と文化をより深く感じることができた」、「稲盛会長の言葉のように、人間として理解



広島平和公園の韓国人原爆犠牲者慰霊碑で行った日韓学生合同追悼式。  
朝日新聞、韓国・東亜日報で報道された(2013年12月23日)



京都国際マンガミュージアムのシンボル「火の鳥」オブジェに感動  
(2013年12月26日)

できることから出発するならば、必ず意思疎通は可能だと信じる気持ちが生まれた」との声が聞かれた。

韓国学生たちの未来に目を向けた感想文を紹介しよう——。

「ともすれば敏感になる韓日関係の懸案について議論できた点がよかった。我々が日本に関心を持っているのと同様に、日本側も韓国に関心を持っていることを再確認できて胸がいっぱいになった。政治や文化だけでなく、新たな分野での韓日協力を模索することもできるのではと思った」

「今回を契機に継続的な交流を続け、私たちの周りの一人一人が色眼鏡を外し、互いにありのままに理解し合い、受け入れることができるよう、架け橋として長期的な関係発展に貢献したい」

日韓の学生たちはSNSで兄弟姉妹のように活発な発信を続けている。

「大人たち」へのこんなメッセージが胸に迫る。「一人一人の真心こもる表情と微笑がいま目に浮かぶ。純粋な笑顔は韓日関係発展の最大の希望である。涙の別れをした私たちは、韓日関係が一歩ずつ前進することを希望する」(高麗大日語日文学科3年、イ・スミンさん)。

おだ がわこう  
小田川興

朝日新聞ソウル支局長、編集委員を経て早稲田大学客員教授、聖学院大学特命教授、高麗大学東北アジア経済経営研究所顧問などを務める。現在、早稲田大学日韓未来構築フォーラム主宰。日本記者クラブ会員。著書に『38度線・非武装地帯をあるく』、『被爆韓国人』(編訳)など多数。

PROFILE

SEOUL で <sup>ダンス</sup> <sup>ダンス</sup> <sup>ダンス</sup> **でダンス・ダンス・ダンス!**

中野敦

2013年12月26日(水)から5日間、Hi Seoul Youth Hostel (ソウル永登浦区にある研修施設)で、日本の中高生が韓国の中高生とK-POPダンスで交流しながら、ことばの学びと交流に対する動機付けを高めるプログラムが、国際文化フォーラム(TJF)と秀林文化財団という日韓の民間財団の協力のもと開催されました。

### K-POPダンスを韓国・日本の中高生と踊ろう!

2回目となる2013年度のプログラムも、互いのことばを学んでいる日韓の中高生を対象に参加者の募集を行いました。日本では、TJFのネットワークや高等学校韓国朝鮮語教育ネットワークの力を借りて、全国に公募しました。韓国では、中学高校で日本語の指導にあたっている先生方の集まりである韓国日本語教育研究会の協力を得て、ソウルと京畿道の学校に周知しました。「K-POPダンスを韓国・日本の中高生と踊ろう!」というキャッチフレーズのもと、日韓とも、プログラム参加に並々ならぬ熱意をもった中高生からの応募が集まり、書類審査の結果、日韓各16名計32名(女子24名、男子8名/高校生28名、中学生4名)が参加するプログラムになりました。

### 日韓の中高生がソウルで合宿生活

プログラムは、参加者が終了後に、「さまざまな価値観をもった人たちがいることを知り、一緒に何かをすることに興味、関心が広がっている」、「もっと韓国語、日本語を学びたくなっている」、ことを目標に設定しました。5日間の合宿型にすることで、日韓の参加者が一緒に過ごせる時間を十分に確保し、料理や買い物など日常生活を共同体験することで、目に見える事象についての気付きや発見にとどまらず、多様な価値観との出会い、ぶつかり、調整といったより深い交流を実現することができました。例えば、チームに別れてダンスの曲決めをする際、皆の意向を尊重し、調整しながら進めようとする日本の参加者と、ひとりひとりが自分の意向をしっかりと主張して良いものを選んでいこうとする韓国の参加者との間で、話の進め方の違いに戸惑

いながらも双方が配慮し合い、自分たちの曲を決めるという様子が見られました。

最後に参加者全員から届けられたコメントには、「考え方とか文化の違いですごく大変だったけど日本でしないこととか、ないものとかたくさん知れてよかった」、「自分の国であたりまえのことが他の国ではあたりまえじゃないことを知ったりしたので、もっとたくさん勉強して広い心で受け止められるようにしたいと思った」というプログラムに参加した後の変化が表れていました。そして、「本当は人見知りだけど、今回勇気を出したらたくさんの人と話せたから、これからも頑張りたい」「大学を卒業したら、違う国と交流することができる職業で活躍して、日韓関係の改善に努めたい」というこれからの自分についても記されていて、多様な仲間との交流に対する興味関心を広げることができたと思います。

「伝えたいのに伝わらない」、「なんとか伝えることができた」という様々な経験を通じて、「もっと韓国語を勉強したい」「もっと勉強してスムーズなやりとりができるようになりたい」「日本語の勉強をしようという気持ちになった」「もっと日本語がうまくなりたい」といったコメントが寄せられ、ことばの学びに対する動機づけを日韓ともに高めることができたと思います。

### 互いのことばを学ぶ日韓の中高生交流プログラム

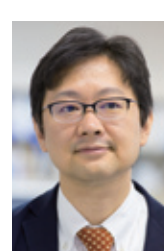
TJFでは、相互理解は、互いの言語・文化を学ぶことにより、初めて成立すると考えています。K-POPダンス発表という目標に向けて、参加者全員が協力して取り組んだことによって深められた理解は、相互の学び合いによって実現しました。TJFは秀林文化財団と協力して、これからも日韓の青少年のためになる、ことばと交流を通じた学びの促進に尽力してまいりたいと考えています。



日韓混合の4チームが100名近い招待客の前で練習の成果を披露

公益財団法人国際文化フォーラム (TJF)  
プログラム・オフィサー

### PROFILE



なかの あつし  
**中野敦**

韓国カトリック大学で日本語講師を務めたのち、文化庁文化語部国語課で日本語教育政策に携わる。2009年より現職。TJF (<http://www.tjf.or.jp/>)では、『外国語学習のめやす』開発プロジェクトや、外国語教師のための研修事業、韓国語講座開設およびコーディネーション、国内の韓国語学習支援と日韓の交流事業などに携わる。



## 第2期日韓新時代共同研究プロジェクト報告書 「新時代の日韓協力—七つの核心的アジェンダー—」を両国政府に提出

第2期日韓新時代共同研究プロジェクト(日本側委員長:小此木政夫慶應義塾大学名誉教授、韓国側委員長:河英善ソウル大学校名誉教授)は、2013年12月24日(火)、報告書「新時代の日韓協力—七つの核心的アジェンダー—」を両国政府に提出し、インターネットで公開しました。

第2期日韓新時代共同研究プロジェクトは、2011年10月の日韓首脳会談(野田総理、李明博大統領(当時))での合意を受け、同年12月に発足しました。2009年2月に開始し翌年10月に報告書「『日韓新時代』のための提言」を発表・提言した第1期日韓新時代共同研究プロジェクトに続き、国際社会に共に貢献していく日韓関係を念頭に、多様な分野の日韓両国の専門家が今後の協力のあり方について研究を進めてきました。

第2期共同研究では、2回の全体会合と4回の分科会合を行い、そこで議論され合意された内容が報告書としてとりまとめられました。

93ページにわたる報告書では、「新時代の日韓関係では、中国の急速な大国化や東アジア経済の著しい拡大を背景に、日韓両国が基本的な価値やルールの共有により、すべての分野にわたって全面的な協力を追求することが求められている」と指摘しています。「新時代の複合共生ネットワークを構築するために、第一に、……従来の日米韓の連携強化はもとより、日中韓の友好協力関係とも背反、矛盾しない方向で模索しなければならない。

……第二に、……日韓両国の関係だけでなく、朝鮮半島の次元、東アジアという地域の次元、グローバル次元という四つの空間にわたって広範囲になされるべきである。第三に、……政治・安全保障・経済問題を中心とした過去のパラダイムを乗り越え、21世紀に入ってその重要性が増している文化、環境、情報知識、科学技術分野における日韓協力をより積極的に推進しなければならない。……」とし、新時代にふさわしい日韓協力の核心的なアジェンダとして、①文化・知識・メディア交流促進、②人的ネットワークの形成、③東アジア複合安保秩序構築、④原子力安全およびエネルギー協力、⑤環境パートナーシップ、⑥東アジア共生経済秩序構築、⑦複合共生技術協力の七つの分野を選定し、日韓両国間の協力の方向性が提示されています。

この報告書は次のウェブサイトでご覧になれます。



これまで両国の委員により活発な議論が重ねられてきた(2013年2月ソウル総会)

外務省「第2期日韓新時代共同研究プロジェクト(報告書の受領)」

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24\\_000014.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24_000014.html)

公益財団法人 日韓文化交流基金「第2期日韓新時代共同研究プロジェクト」

<http://www.jkcf.or.jp/projects/kaigi/newera/>

### <第2期日韓新時代共同研究プロジェクト両国メンバー名簿(2013年12月現在)>

	日 本		韓 国	
	氏名	所属	氏名	所属
委員長	小此木政夫	九州大学特任教授 慶應義塾大学名誉教授	河英善	東アジア研究院理事長、 ソウル大学校政治外交学部名誉教授
幹 事	西野純也	慶應義塾大学法学部准教授	李元徳	国民大学校国際学部教授
委 員	小川英治	一橋大学大学院商学研究科教授	金基石	江原大学校政治外交学科教授
	木村福成	慶應義塾大学経済学部教授	金良姫	大邱大学校経済学科教授
	國分良成	防衛大学校長	金雄熙	仁荷大学校国際通商学部教授
	小針 進	静岡県立大学国際関係学部教授	金浩燮	中央大学校国際関係学科教授
	児矢野マリ	北海道大学大学院法学研究科教授	文興鎬	漢陽大学校国際学大学院教授
	澤田康幸	東京大学大学院経済学研究科教授	朴榮濟	国防大学校教授
	添谷芳秀	慶應義塾大学法学部教授	朴喆熙	ソウル大学校国際大学院教授
	田所昌幸	慶應義塾大学法学部教授	孫洌	延世大学校国際学大学院教授
	中西 寛	京都大学大学院法学研究科教授	尹徳敏	国立外交院院長
	長岡貞男	一橋大学イノベーション研究センター教授	李淑鍾	成均館大学校国政管理大学院教授
	平岩俊司	関西学院大学国際学部教授	張濟國	東西大学校総長
	深川由起子	早稲田大学政治経済学術院教授	全在晟	ソウル大学校政治外交学部教授
	村田晃嗣	同志社大学学長	全鎮浩	光云大学校国際学部教授
	薬師寺泰蔵	(公財)世界平和研究所理事・研究顧問	洪鍾豪	ソウル大学校環境大学院教授

# 日韓文化交流基金事業報告

本号では、2013年度第3四半期(2013年10月1日から12月31日まで)の実施事業を紹介します。

## 1 青少年交流事業

### 訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国教員 (第3団)	金正鎰(キム・ジョンイル) 善隣インターネット高等学校 校長	19	6	13	10/1～ 10/10	東京都立三田高等学校 東京都立田柄高等学校 国立東京工業高等専門学校
韓国教員 (第4団)	金明植(キム・ミョンシク) 中山高等学校 校長	20	9	11	10/1～ 10/10	(3団) 鹿児島県霧島市 霧島市立陵南中学校 (4団) 佐賀県有田町 有田町立有田中学校
韓国大学生 (外交部)	白ナレ(ベク・ナレ) 韓国外交部文化交流協力課 書記官	30	16	14	11/6～ 11/15	滋賀県東近江市 滋賀県立大学

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
韓国高校生 (第1団)	李相憲(イ・サンホン) 眞乾高等学校 校長	50	19	26	10/17～ 10/23	長野県 篠ノ井高等学校
韓国高校生 (第2団)	金應照(キム・ウンジヨ) 大田福守高等学校 校長	50	12	33	11/7～ 11/13	兵庫県立 伊川谷高等学校

\*1引率含む \*2生徒のみ



伝統文化(和太鼓)体験  
(韓国教員訪日団)



田柄高校における教員交流会  
(韓国教員訪日団)



雨森芳洲庵で朝鮮通信使について説明を聞く  
(韓国大学生訪日団)



茶道体験  
(韓国大学生訪日団)



伊川谷高校で書道授業  
(韓国高校生訪日団)



伊川谷高校での体育授業  
(韓国高校生訪日団)



訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本教員	中川君隆 佐賀県江北町立江北中学校 教諭	27	18	9	11/12～ 11/21	上炭初等学校 梧琴中学校 中山高等学校 木浦大学校
団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
兵庫県高校生	清瀬欣之 兵庫県教育委員会事務局高校教育課 副課長兼 義務教育課 副課長	50	8	38	10/20～ 10/26	盆唐中央高等学校
長野県高校生	三浦章 長野県教育委員会教学指導課 高校教育指導係長	50	18	28	11/17～ 11/23	眞乾高等学校

\*1引率含む \*2生徒のみ



上炭小学校 教員交流会(教員訪韓団)



木浦大訪問(教員訪韓団)



眞乾高校での授業体験(長野県高校生訪韓団)

2 アジア国際子ども映画祭参加訪日団

アジア国際子ども映画祭(本選 11月30日(土)、兵庫県南あわじ市)に参加する高校生9名を11月24日(日)から12月2日(月)までの9日間招聘しました。映画祭本選で韓国グループは、仁川国際高校が「Trauma／トラウマ」で優秀賞を、梅香女子情報高校が「Outcast／いじめ」で奨励賞を受賞し、舞台上で表彰されました。韓服に身を包んだ、受賞者たちはバックスクリーンに大きく映し出され、舞台上でひときわ輝いて見えました。

なお、この映画祭は日本のみならず海外14の国と地域の子もたちが参加し、異なる国や地域の作品を互いに鑑賞し合うことで、相手国の文化や習慣、自分たちの考えとの共通点や相違点などを知り、相互理解の強化および友好関係の構築を図ることができるものです。

今回は「JENESYS2.0」の一環であるため、韓国の一行は映画祭参加のほか、川口総合高校を訪問し学生間交流を行うほか、NHK見学等、専門性に合った見学も行いました。



優秀賞を受賞した仁川国際高校の3人は舞台上で表彰されました

3 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2013年度助成対象団体より、次の研究成果物が刊行されました。

- 『韓国朝鮮の文化と社会 第12号』  
(韓国・朝鮮文化研究会編、株式会社風響社)
- 『現代韓国朝鮮研究 第13号』  
(現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社)



『韓国朝鮮の文化と社会 第12号』



『現代韓国朝鮮研究 第13号』

# 日韓文化交流基金 賛助会員制度の御案内

日韓文化交流基金は1983年の創立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施しております。2012年には公益財団法人として新たなスタートを切り、従来以上に未来志向の日韓関係構築に向けて一層の努力を傾注しているところでございます。

こうした活動のために、当基金では賛助会員制度を設け、趣旨に御賛同頂ける多くの方々への御支援を賜りながら、更なる事業活性化を図っていく所存でございます。

日韓文化交流基金 30周年記念  
「日韓文化交流基金 30年史」を会員及び  
新規入会の方全員に贈呈いたします。

賛助会員の皆様には特典といたしまして、広報誌『日韓文化交流基金NEWS』(季刊)及び、当基金が実施する講演会をはじめとする各種催しの参加案内をお送りいたします。また、日韓文化交流に関するニュースやお知らせなどを、メールマガジンでお届けいたします。2014年度は当基金創立30周年記念として刊行した「日韓文化交流基金30年史」を贈呈いたします。

皆さまのご入会を心よりお待ちしております。

## ■ 頂いた会費は講演会や助成事業などに使われます

会員の方々から頂いた会費は、当基金主催の講演会と民間交流団体への助成事業経費の一部に充当されています。該当事業につきましては年度毎に御報告いたします。

2013年度の講演会と助成事業について御紹介いたします。

### 〈講演会〉

2013年度講演会 源流シリーズ		
2013年 10月1日	「韓国映画の源流」	四方田犬彦
2013年 12月9日	「韓国流行小説の源流」	和田とも美 富山大学東アジア言語文化講座准教授
2014年 3月28日	「K-POPの源流」	田月仙 声楽家・ソプラノ歌手

### 〈助成事業〉

『韓国朝鮮の文化と社会 第12号』『現代韓国朝鮮研究 第13号』の2点に助成いたしました。詳しくは本誌p19「日韓文化交流基金事業報告 3 学術定期刊行物助成」をご覧ください。



「韓国映画の源流」(2013/10/1)講演風景。お話は映画だけでなく韓流ブームにも及び、四方田犬彦講師のユーモラスな語り口が会場を沸かせました。

## ■ 入会のご案内

### ○年会費

- (1)個人会員 1万円 ※1口以上何口でもご加入に  
(2)特別会員 5万円 なれます。会員期間は、会費  
(3)法人会員 10万円 の入金日から1年間です。

### ○お問い合わせ・資料のご請求

公益財団法人 日韓文化交流基金  
〒105-0001  
東京都港区虎ノ門5-12-1 虎ノ門ワイコービル4F  
Tel 03-5472-4323 / Fax 03-5472-4326  
E-mail membership@jkcf.or.jp  
ウェブサイト <http://www.jkcf.or.jp>

### ○年会費のお支払方法

- (1)郵便振替  
口座番号 00160-9-668460  
口座名称 公益財団法人 日韓文化交流基金

### (2)銀行振込(新たな支払方法)

ゆうちょ銀行 <sup>ゼロセロハチ</sup>〇〇八支店(普通)  
口座番号 8505617  
名義 公益財団法人 日韓文化交流基金  
フリガナ ザイ)ニッカンプンカコウリュウキキン

※手数料は当基金で負担いたします。

●お振込みと合わせて、当基金ウェブサイトの賛助会員制度のページに賛助会員制度申込みフォームがありますので、そちらに必要事項を御記入ください。

## ■ 2013年12月31日現在 賛助会員リスト

(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)  
ご厚意に深く感謝申し上げます。

### 特別会員

檜崎正博

### 個人会員

秋鹿敏雄	饗庭孝典	秋月 望	朝倉敏夫
浅野豊美	阿部孝哉	李 炯 喆	磯崎典世
林 在 圭	内田富夫	梅田博之	大竹洋子
荻野綱男	小倉紀蔵	生越直樹	越智通雄
小野正昭(3)	梶谷 崇	加藤 章	姜 英 淑
岸 真清	木畑洋一	金 春 美(3)	熊野清貴
黒柳慶子	小泉勇治郎	小針 進	齋木崇人
坂井俊樹	櫻井 浩	鮫島章男(2)	徐 正 基
上保 敏	白川 豊	芹川哲世	千 玄 室
高田加代子	田中正敬	崔 寧 桓	月脚達彦
中江 新(3)	中尾美知子	中川 聡	中塚 明
中野照男	中山隆夫	中山武憲	中山めぐみ
並木正芳	日本民藝館	波田野節子	浜之上幸
林 和彦	林 史樹	福原裕二	藤原祥二
堀 泰三	洪 宗 郁	前田二生	松井貞夫
三谷太一郎	三ツ井崇	實生泰介	茂木敏夫
山口 晃	柳 震 太	尹 明 憲	余田幸夫(2)
和田とも美	渡辺 浩		